

略 歴 調 書

令和4年 11月 14日

(ふりがな) 氏 名	みまた ひろみつ 三股 浩光	生年月日	昭和35年 2月28日生（62歳）
最終学歴	1988年 大分医科大学大学院医学研究科修了		
専門分野	泌尿器科学		
学位称号	医学博士号		
学 歴			
年月		事 項	
1984年	3月	大分医科大学医学部医学科 卒業	
	4月	大分医科大学大学院医学研究科入学	
1988年	3月	同 上 修了	
職 歴			
年月		事 項	
1988年	4月	大分医科大学医学部附属病院（泌尿器科） 医員	
1989年	6月	大分医科大学医学部（泌尿器科） 助手	
1996年	6月	大分医科大学附属病院（泌尿器科） 講師	
2000年	4月	大分医科大学医学部泌尿器科学講座 助教授	
2003年	10月	大分大学医学部腫瘍病態制御講座（泌尿器科学） 助教授	
2004年	6月	大分大学医学部腫瘍病態制御講座（泌尿器科学） 教授	
2020年	4月	大分大学医学部附属病院 病院長	
所属学会	日本泌尿器科学会元理事、名誉会員、西日本泌尿器科学会元理事・名誉会員 日本内視鏡外科学会評議員、日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会元理事 日本排尿機能学会元理事、日本老年泌尿器科学会評議員 日本透析医学会元評議員、日本 Men's Health 医学会元理事 九州連合地方会元理事、泌尿器科再建再生研究会 顧問 腎泌尿器疾患予防医学研究会顧問、European Association of Urology 会員 九州人工透析研究会元代表世話人・顧問、九州腎移植研究会元代表幹事・顧問 大分県排尿リハビリテーション・ケア研究会元代表世話人・顧問 大分人工透析研究会会長		
学会及び社会 における活動	大分県臓器移植医療協会 理事長、大分県立看護科学大学 理事		
免許・資格等	医博甲 大分医科大学 第14号、医師免許第281914号 日本泌尿器科学会 専門医・指導医 日本透析医学会 認定医・指導医 泌尿器腹腔鏡技術認定		
賞 罰	なし		
その他参考と なる事項			

(教育に関する業績)

卒前教育では、医学科2年生の医学生物学、3年生のチュートリアル教育の責任者、4年生研究室配属では腎泌尿器外科学講座の基礎研究の指導、臨床実習では外来診療と手術を教えてきた。看護学科では、2年生に腎・泌尿器疾患を、大学院修士課程では泌尿器癌の講義を行なった。これまでに大学院医学博士課程にて17名の指導を行い、医学博士号を取得させ、医学修士課程では3名に修士号を取得させた。

卒後教育では、日本泌尿器科学会の専門医を取得させた後、日本透析医学会や日本排尿機能学会、日本臨床腎移植学会、日本移植学会、日本小児泌尿器科学会等の認定医や日本泌尿器内視鏡学会腹腔鏡技術認定を取得できるよう指導してきた。

病院長就任後は、卒後臨床研修センターにてメンター制やベスト指導医賞を設けて、指導医の質の向上を目指しました。また、看護師特定行為統括センターを設置し、本年には特定行為研修修了看護師が4名誕生しました。大分県立看護科学大学大学院修士課程の学生実習も行っています。

(診療に関する業績 (医療安全に関するものを含む))

ほぼ全ての泌尿器科疾患の診療に携わってきました。特に注力したのは低侵襲手術で、本邦初となる単孔式腹腔鏡下ドナー腎採取術や、様々な単孔式手術や減孔式手術の開発を行い、全国でワークショップの開催や多施設共同研究も指導的立場で行いました。

その他、血液浄化センター長や材料部長も長く務め、医療安全管理部にも2000年以降関与し、医療安全管理部長や医療安全管理責任者を務めました。

病院長としては、新型コロナウイルス感染症に対応するため、対策本部を立ち上げ、県下の感染状況や個人防護具等の医療材料の調達状況、院内感染やクラスター発生時等に迅速に対応できる体制を構築しました。

本年度に低侵襲手術センターを設置し、主にロボット支援腹腔鏡下手術に関して、診療科横断的な技術開発や安全管理、教育、効率的な運営等を図っております。

(研究に関する業績)

臨床研究では前述の低侵襲手術の開発に取り組み、国内外で新技術の発表を行ってきました。基礎研究では新たな尿失禁治療法の開発を目指して、外尿道括約筋幹細胞の研究に取り組み、多くの競争的獲得資金や賞を受けてきました。現在も外尿道括約筋におけるミトコンドリア障害について新知見を得ており、研究を続けております。

病院長としては、新型コロナウイルス禍への対応に追われ、十分な研究支援を行えませんでした。本年度には国産手術支援ロボットhinotoriや最新のcryoablationの機器を九州で初めて導入し、臨床研究を行えるよう支援しました。臨床研究センターでは治験症例の外来検査や副作用発生時の入院体制等を整備し、安全な治験を実施できるよう支援しました。

(地域医療への貢献に関する業績)

泌尿器科教授としては、西部医療圏を除いて大分県下全般の病院に常勤あるいは非常勤の泌尿器科医を派遣し、大分県下の泌尿器科診療と透析医療を維持してきました。

病院長としては、特に新型コロナウイルス感染症への対応として、行政からの依頼である宿泊療養施設や臨時の医療施設、県外への医療スタッフの派遣を行いました。新型コロナウイルス感染症の透析患者に対して本院が中心となって入院調整を行い、国立大学病院の中では2番目に多くの患者を受け入れました。昨年からはほぼ全ての軽症患者は透析施設自院で管理できる体制とし、本院は中等症以上に限って入院管理としました。

昨年4月より本院は大分県立病院と並んで基幹災害拠点病院に指定されました。災害時の多数傷病者受入訓練やDMAT隊員の派遣等の体制整備に努めました。

連携医療機関登録制度を設け、病診連携を強化するとともに、WEBにて登録医に対する最新の医療に関する啓発活動を行いました。また定期的に病院主催の市民公開講座を開催し、大分県民への啓発活動に努めました。

(病院経営・管理運営に関する業績)

私は、腎泌尿器外科学講座教授として泌尿器科科長や血液浄化センター長、材料部長を務め、副病院長としては医療安全管理部長、クオリティマネジメント室長、医療安全管理責任者を務めました。2019年の病院機能評価を受審する際は、統括責任者として規程や細則を整備し、臨床指標管理部門やラピッドレスポンスシステム等の新たな組織の設置に関与しました。

病院長就任後は、本院の経営基盤を安定させるため、病診連携の強化が欠かせないと考え、連携医療機関登録制度を設け、病診連携セミナーの開催や逆紹介の推進を図りました。また広報委員会を新設して、市民公開講座を開催し、大分県における本院のプレゼンス向上に努めています。本年度は低侵襲手術センターを新設し、特にロボット支援腹腔鏡下手術の手技開発や安全管理、診療科横断的な教育、効率的な運用等を目指しています。今後は各診療科に共通するテーマについて講習会を開催し、本院だけでなく大分県下の消化器外科や呼吸器外科、泌尿器科、産婦人科の技術向上に努め、大分大学から国内外に成果を発信したいと考えています。

(その他(国際交流等)の業績)

腎泌尿器外科学講座では、中国から3名の臨床研修生と1名の大学院生を受け入れ、教室員は入局後早期に国際学会に参加させてきました。教室員の海外留学先は米国イエール大学、ハーバード大学、エモリー大学、南カリフォルニア大学、サンフランシスコ大学、ピッツバーグ大学で、研究内容は排尿機能や泌尿器癌、腎移植で、いずれも世界のトップクラスの業績を誇る教室です。また、副病院長時代に海外留学支援制度を設けて、医師だけでなく他の医療スタッフに対しても海外留学や国際学会への参加を推奨してきました。

※10.5ポイントの明朝体を使用して作成願います。